

中国人の獄中被爆80年

外国人被爆者がなぜ生まれたのか。戦争や植民地支配という日本の負の歴史と当然、関わる。その中でも戦時下の中国人強制連行という重い事実は忘れたくない。

先週、中国河北省の孟憲法さん(55)が広島を訪れた。2006年に死去した中国人被爆者、孟昭恩さんの三男だ。

彼は日中戦争で捕虜となり、広島県安芸太田町の安野発電所建設工事で過酷な労働を強いられ、ついに、広島刑務所で閃光を浴びた。帰国後も苦しい生活を送ったという。

強制連行を語り継ぐ民間団体に招かれた憲法さんは、証言集会や発電所そばの「安野中国人受難之碑」前の追悼の

集いに臨んだ。亡き父は19

93年に再来日して被爆者健康手帳を取得したが、まさに苦難の生涯だろう。

中国人強制連行は愚かな国策というしかない。戦局の悪化に伴う労働力不足を交戦中

戦時下の真実 改めて直視を

の中国から補おうと閣議決定し、全国135カ所の炭鉱、鉱山、港湾、工事現場などで

元捕虜や市民ら約4万人を働に収監され、被爆した。それかせた。広島における「獄中被爆」はその中で起きた。

軍都の電力供給を担うため太田川上流で着工した安野発電所工事の請負企業、西松組(現西松建設)は360人を中国から連行する。うち17人が原爆に遭い、5人が犠牲となったとみられる。二つの異

後手に回る。民間の調査で消息が判明し、再来日して被爆者健康手帳を受けたのは広島で獄中被爆して帰国した中国人のうち4人だけだ。訪日治療を望みながら目前でがんで息を引き取った人もいた。

孟さんは生前、歴史の真実を伝えることを何より求めていた。被爆80年に当たり、埋もれがちな獄中被爆の真相と背景を改めて直視したい。

中国人に限らない。広島で

は植民地下の朝鮮半島の出身者や戦時中の徴用工らが数多く被爆し、全容はいまだ分らない。日本を離れた被爆者と国内の援護策の格差について

は裁判闘争を経て是正が一定に進んだ半面、外国人被爆の実態を語り継ぐ営みは十分かどうか。歴史への謙虚な姿勢がここでも問われよう。

社説

2025・10・26

常な事件と重なったためだ。一つは中国人収容所で起きた、暴動と言わなければならない事件だ。導水トンネル掘りなど連日の重労働の中、日本人の側に立つて同胞を弾圧した2人の中国人が殴られ、命を落とす。実行者が分からないまま警察がひとまず検挙した孟さんたち11人が広島刑務所に収容されていた。

に当時の国防保安法違反で広島刑務所に収容していた。共通するのは中国人への厳しい抑圧が獄中被爆という特別な悲劇を生んだことだ。安野の強制連行に関しては被害者たちが西松建設を相手に起こした訴訟が2009年に和解し、一定の補償が行われた。ただ被爆者への援護は